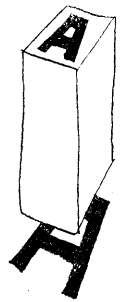


私の幼児教育論

松平信久



幼児教育に携わっておられる方々なら、とうの前から当然のこととして知っておいでのことなのかも知れないが、私には子どもの持つ一面について改めて教えられた苦くもまた恥ずかしい一つの経験がある。

それは私の長女がまだ幼稚園に通い始める前の頃だった。

子どものしつけや健康管理に手ぬかりがあったのだろう。母親がフト気がついた時には長女の歯は五、六本もムシ歯になっていたのだった。それも症状はかなり進行していて、その日まで痛がらなかったのが不思議に思える程であった。

これは治療も簡単には行きそうにもない。相当痛がるかも知れない。私たち未熟な夫婦は医者通いの手間や、愚図る子どもの様子を予想してひどく憂鬱になった。

「何とかダ、マ、ン、テ、医者に連れていかねばならない。……私たちはそれと悟られることのないようにと気を使いなから子どもを連れ出す算段をした。何か買物に行くというようなことであつたと思う。

こちらの周到な配慮にも関わらず、子どもは動物的な勘とでもいふべき鋭さで気配を感じるものである。普段ならば一も二もなく喜んで外出の仕度をする彼女も、その日はいろいろと理由をあげては行くことを拒むのであ

る。そこで「今日は○○を買ってあげようかな……」と誘い水をかける。「一緒に行けば○○を買ってあげます」と取引をしないのは、教育学などに携わっている親としてのうしろめたさと、選択は子どもの判断に任せただけという免罪符を得たいがためのズルサの故であつたらう。

こうして何とか連れ出し、歯医者の前にまで来た。当然のことながら娘は危険を感じて親の手を引っぱって早く帰ろうと催促する。ここまで連れて来たのに何で帰してなるものか。「今日はちょっと歯医者さんの部屋の中をのぞいてみるだけ。あなたのことは診てもらわないうから入るだけ入ってみよう……」。道路上での談判の末、大人の側がようやく粘り勝を収めて医院内に入る。しかし、院内に入ればそれだけで済む訳には行かない。「今日はお医者さんの椅子に座るだけ。ガーと削るのはやらないからネ、ネ」とここでも懸命の説得が続く。不安と不信の眼差しを向けながらしかし看護婦さんにひきずられるような形となって止むなく彼女は治療室へと消えていったのである。

翌日の連行は更に困難となった。外出の気配を感ずるや娘はテーブルの下にもぐり込みテーブルの足を握って放さない。格闘の末やっと連れ出し、そして又待合室での愁嘆場。

ここで私達はその歯医者さんからお叱りを受けるところとなった。

「痛くないとか、何もされないからなどと言って誤魔化すことが一番いけないことなんです。自分でムシ歯を作ってしまった以上、それは治療する他ないし、多少の痛い思いをしなければならぬのは当然なんです」。

このことばは私たちにはひどく応えた。確かに私たちはこの度は最初から子どもを「だます」ことから出発していた。そして一度そういう形で事が始まると、その後につきつぎとそれを補修するために誤魔化しを重ねることになるのである。

その日帰ると私たちは娘に言い聞かせた。今まで大事な歯を大切にしてください、そしてそれはきちんと歯医者さんに治してもらわなければならないこと、更

にそのために多少のつらさは我慢しなければならぬこと等である。

次の治療の日、娘は一言も文句を言わずに私たちについて来た。そして治療の順番が来ると一人でさっさと席を立ち治療用の椅子に座ったのである。

私はこの出来ごとを通じてこの歯医者さんから大切なことを教えられたし、それとともに子どもという存在についての見方を大きく変えられた。頭では理解していた積りのことを、娘との関わりの中で改めて思い知らされたとも言えようか。

幼児の表情はあどけない。子どもたちのしぐさやことばのみずみずしさは大人たちにとっては心の洗われる思いである。そして時には我々は幼児の我儘な振舞いや、未熟さの故の失敗や不完全を成長の一過程におけるかけがえのない経験をして評価したり賞讃を与えることもある。

幼児の現実の姿に虚心に対面し、それとして受けとめ

ることは、幼児と大人との間に通路を開く前提として必須の条件であろう。子どもの無邪気さや大人には思いもつかぬような発想の面白さなどから、成人するに従って失って来てしまったものに気づかされ大人としての生き方を振り返ってみるといふことも又重要なことである。

しかし、ともすれば我々は幼児の持つあどけなさや一見しての「幼なさ」の故に幼児に対する見方を鈍らせて来たことはなかったであろうか。幼児の持つかくれた逞しさ、自分自身に対する誇り、ものごとを追求し集中する力などに対して鈍感であったり、それから側面を見出すことに怠惰であったりしたことはなかったであろうか。そして何よりも、子どもはどのような側面を持った「ひとりまえ」の存在であることを承認することに臆病でありすぎはしなかったか。

幼児教育の現場でも、良心的であり子どもを大事にするという幼稚園や保育園であればある程、子どもに手をかけることが望ましい保育の姿であるという考えのもと

に、逐一手をかけ声をかけることが行なわれている場合が多いように思う。

たとえば、最も身近な例として、子どもたちを円形や一列に並ばせるという場面を取り上げてみよう。多くの幼稚園で目にするのは先生が一人一人の子どものところに行つて手を引いたり体を押ししたりしてまっすぐに並ばせようとしている情景である。子どもたちは引かれたり押されたりするたびに、これという意図も目あてもないままに身体を移動させる。だから先生が列の後の方に行つた時にはもう前の方の列は崩れてもとの木阿弥ということになつている場合が多い。身体を近づけないでことばで注意を与える場合でも基本的には同じことがなされていると言えるであろう。

こういう動作やことばによる働きかけの効果の程はともかく、このような注意を与え続けていないと教師自身が不安であるかのように見える。そして逆に言えば、このようにして手を取り足をとつて指示し注意を与えることによつて保育という仕ごとが成り立っていると考えら

れている節がうかがえるのである。

勿論、このような働きかけや注意が不必要だという訳ではない。時に応じてどうしても不可欠である場面は数多くあるであろう。問題なのは、子どもを育てるといふことはこのようにして手をかけて助けることであると考へられていたり、逐一手をひき体をpushさなければ子どもを動かすことが出来ないと考えられている向きがないかということである。そんなふうを考えることもなく優しく思いやりのある行為として何気なく行なわれている場合も多いかも知れない。

ところで、このような「手助け」は子どもにとつてどのような意味を持っているのであろうか。

子どもが自分のやりたいことをやらなければならぬことを解決する前に教師や親などの周囲の者たちがつい肩代りをしてしまうことは少なくない。子どもが解決への努力を進めている途中で手出し口出しすることも日常的によく行なわれている。あるいは、子どもがさあこれから仕ごとに取り掛ろうとしているその矢先に行動を促

す声が飛ぶということもしばしばある。

このような時に多くの場合、手助けをした大人の方では子どもに対する優しさや思いやり、愛情などの故にそれを行なったと解釈している場合が多いように思う。子どもも手助けを受けた時点では有難く親切な援助を受けたと考えているかも知れない。事実本当に必要な助力が適切になされたことも数多かつたには相異なる。

しかし、手助けを受け課題の肩代りをしてもらうたびごとに、子どもは、「あなたにはこれをするのができないのだ。あなたは無力なのだ」という判定を間接的な形で受けることにもなる。いちいち指図をされ、その通りにすることを要求されるという場合も事態はほぼ同じだと言えよう。「あなたは一人では適切な判断はできないのです。だから大人の言う通りに従いなさい」という暗黙の判定が含まれていることになる。

このような場面では少くとも結果的には、子どもは自分で自分の力を試し、そのことによって自分の現実的な能力を知り、それに見合った自己の現実的な能力を知

り、それに自己像と自信とを獲得することを大人が妨げているばかりでなく、それらのものを放棄するようにと方向づけていることにもなってしまうのである。子どもが成長する過程で助力や援助は是非とも必要である。それなくしては生命の維持さえも不可能である。しかしそれとともに、子どもの願望も意図や個々の能力に対する配慮を欠いた援助や助力は逆に子どもの存在を脅かすことになる危険を孕んでいることに思いを至す必要があるように思う。さあこれからというやうな気になっている子どもに対して叱咤の聲が飛ぶ時、子どもが激しい怒りの色を見せるのは、育ちつつある自己の世界に無用の侵害がなされることへの抵抗の表われであると言えよう。

保育の場において、子どもの現実の姿をそれとして承認し、子どもが様々な形で示す徴表から子どもの思いや願い、あるいは子どもをとりかこんでいる複雑な状況や背景を知っていこうとする姿勢は常に忘れられてはならないと思う。そして子どもたちが家庭生活や社会生活の

中で身につけたしぐさやことば、あるいは興味や欲求などに対応することも保育者として大切なことであろう。

しかし我々は、単に子どもの現状の姿に対応するといふことから一步踏み出して、子どもに対する願いを更に高め深めることをすべきだと思う。日常的な諸経験や様々な刺激などによって被われている子どもの表層的な部分を一枚剥ぎ取ったところにある子どもの美しさ、たくましさや強さ、あるいは子どもの心の奥深くに眠っている願いなどに働きかけ、それをひき出し開花させるところに保育の仕事の真髄がある、と私は思う。

たとえば子どもの体の動きについて考えてみよう。子どもたちを取り囲む状況は、子どもの身体の動きをさへも萎縮させ、ゆがめ、固苦しいものになっている場合が少なくない。あるいは「大事」にされ過ぎていたために伸びるべき所が伸びず、張るべきところが張っていないというようなことも多いかも知れない。

二人の子どもがペアになって手を取りあいピアノに合わせて進むという場面だけでも、自分の手をおすおすと

自信無げにさし出し、腕を組んだあとも体を硬ばらせてぎこちなくしか動けないという子どもに出会うことがある。そんな子どもでもフトしたことから緊張が少し解け、体の動きにしなやかさが蘇り表情に柔かさがもどることがある。教師の眼はそのような少しの変化の中にも表われる美しさや柔かさ——あるいは瞬時によぎる不安の翳——などを見つけ出すべく鍛えられなければならぬと思う。そしてそのようにして見出したものを更に広めたりすることに保育の主眼が置かれるべきではなからうか。いわば、子どもが素手で持っている可能性を最大限に生かし発展させることに——願いがこめられ力が注がれてもよいのではないかと思う。何故ならば、そのようなものこそ最も美しく柔らかいからである。

教師や周囲の大人たちが子どものためにと思っっていることで、実際はそのような子どもが本来の力や美しさを育てるところか却ってそぎ妨害してしまっていることは数知れぬ程あると思う。例えば運動会や発表会などの行事の時、凝った衣装や仰々しい被りものに身を包

んでいる子どもたちを見ることがある。その時に、何と惜しいことが行なわれているのかと残念に思うことが多い。凝った衣装よりも仰々しい被りものよりも、子どものすらりと伸びた手足や、集中してさし出された指の一本一本や、緊張して自分を保とうとする表情などの方がどれ程美しく繊細で又力強いかと考えさせられることが多いからである。服装や舞台装置は、子どもそのものの姿を最大限にひき出しひき立たせるためにこそ整えられるべきであろう。それが逆になってしまい、そのために子どもの持っている美しい動きや表情がかくされてしまったり、子どもが衣装や舞台装置に寄り掛ってしまったりすることになれば著しい本末転倒であると言わねばならない。絶え間なく流しつづけられるレコードやピアノの音も、ただ単に雰囲気を感じ上げるためとか、空白の時間をつくらないためということのためになされるのだとすれば、それは子どもの力をそぐことになるだろう。子どもが育つということは自分で自分の空間を支配できるようなことでもある。そのようなことは

大人になったからとて完全に出来るものではなからうが、しかし子どもを育てることの目標の中軸にすえられるべき課題だと思う。絶え間なく流されているレコードは、子どもが支配しうづめるべき空間を初めから大人が埋め尽くし、与えられた環境の中に子どもをお客として配置するということにならないだろうか。そのような状況の中で、子どもはどうして集中し自分の課題に立ち向かうことが出来ようか。もの音一つしない静寂の場で、子どもの凛とした声が響く。簡素な舞台の上で子どものしなやかな動きがその場の焦点となる——こういう武器を利用して子どもは自分の空間を支配する。

私は幼児教育の場でもこのような世界が創り出せないものかと考える。そしてこのようなことは子どもに対する型にはまった訓練ということによって成り立つものでは決してないと思う。子どもの持っている力や、内面の世界の深さに対する教師の畏敬にも似た気持が生み出すところの、子どもに対する願いが創り出す仕事なのではなからうか。

(立教大学)